

※時課の変更部分

【 第六時課 預言のトロパリ 第8調 】

誦経) ^{さんび}讚美たるハリストス^{われら}我等の^{かみ}神、^ち地に^お居る^{もの}者を^{おのれ}己に^{むか}向わしめて、^{これ}之を^{すく}救わん^{ため}爲に^ち地

^{ふる}を^{おのれ}震わせ、^{じんじ}己の^い仁慈^{がた}と^{じれん}言い^よ難き^{またこれ}慈憐^{かた}に^{しゅ}困りて^{しょうしんぢよ}復^{きとう}之を^{堅むる}主よ、^生神女^のの^{祈禱}祈禱

^よに^{われら}困りて^{あわれ}我等^{たま}を^憐憐^みみ^{給え}給え。

【 提綱 第100聖詠 】

司祭) ^{つつし}謹^きみて^き聴^くく^{べし}べし。

誦経) ^{プロキメン}提綱、^{だいし}第四^{しらべ}の^{われあわれみ}調、^{しんぱん}我^{うた}憐^{しゅ}と^{なんぢ}審^{うた}判^{たてまつ}とを^{らん}歌^{らん}わん、^主主よ、^爾爾に^歌歌を^奉奉^{らん}らん。



われあわれみとしんぱんとをうたわん、しゅよ、なんぢにうたをたてまつらん。

我 憐 審 判 歌 主 爾

ち に う た を た て ま つ ら ん。

歌 奉

誦経) ^{われきず}我^{みち}玷^{おも}なき^道道^をを^思思^{わん}わん。



われあわれみとしんぱんとをうたわん、しゅよ、なんぢにうたをたてまつらん。

我 憐 審 判 歌 主 爾

ち に う た を た て ま つ ら ん。

歌 奉

誦経) ^{われあわれみ}我^{しんぱん}憐^{うた}と^審審^判判^とと^をを^歌歌^{わん}わん、



しゅよ、なんぢにうたをたてまつらん。

主 爾 歌 奉

【 イサイヤの預言書 45章 11—17節 】

司祭) ^{えいち}睿^智智、

誦經) イサイヤの預言書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし。

誦經) 主イスライリの聖なる者及び其造成主は是くの如く言う、爾等我に我が諸子の

未來の事を問い、又我が手の工に付きて我に指示せんと欲するか。我地を造り、其

上に人を作れり、我即我が手は諸天を張り、我又其悉くの軍に法を予え

たり。我義を以て彼を起せり、亦其悉くの途を平にせん。彼は我が邑を建て、

我が俘囚を、贖の爲ならず、賞の爲ならずして釋さん、主サヴァオフ之を言う。

主是くの如く言う、エギプトの勤勞、エティオピアの貿易、サヴェヤの長高き人は、

皆爾に歸し、爾に屬せん、彼等爾に従い、縲綆を以て來りて、爾の前に俯

伏し、爾に求めて云わん、神は唯爾に在り、此の外に他の神なし。イスライリの

神、救主よ、實に爾は隠れ在す神なり。彼等皆恥を得て辱しめられん、偶像

を造る者も皆彼等と共に恥を以て退かん。惟イスライリは主に在りて永遠の

救を以て救われん、爾等は無窮の世に耻を得ず、辱を蒙らざらん。

※ 主よ、願わくは爾の慈憐は速に我等を迎えん、、、へ

※晩課の変更部分

(「カフィズマ」は第18カフィズマ)

【 第140聖詠 第6調 】



しゅよなんぢによぶすみやかにわれにいたりた給
主 爾 呼 速 我 格 た 給

ま え 、 しゅよ われ に き き た ま え 、
主 我 聴 給

しゅよなんぢによぶすみやかにわれにいたりた給
主 爾 呼 速 我 格 た 給

ま え 、 なんぢによぶときわがいのりのこ
爾 呼 時 我 禱 の り の こ 聲

えをいれたまえ、しゅよわれにききた給
納 給 主 我 聴 給

ま え 、 ねがわくはわがいのりはこう
願 我 禱 り は こう 香

ろのかおりのごとくなんぢがかんばせのまえ
爐 香 如 爾 顔 前

にのぼり、わがてをあぐるはくれの
登 我 手 擧 暮

まつりのごとくいれられん。しゅよわれに
祭 ご 如 納 主 我

ききたまえ。

誦經) しゅ わ くち まもり お わ くちびる もん ふせ たま わ ころ よこしま ことば
主よ、我が口に衛を置き、我が唇の門を扞ぎ給え、我が心に邪なる言

かたぶ ふう おこな ひと とも つみ いいわけ なか ねが われ かれら
に 傾 きて、不法を 行 う人と共に、罪の 推 諉 せしむる 母れ、願わくは我は彼等の

あまみ な ぎじん われ ばつ こ きょうじゆつ われ せ こ い
甘味を嘗めざらん。義人は我を罰すべし、是れ 矜 恤 なり、我を譴むべし、是れ極と

うるわ あぶら わ こうべ なや あた もの ただわ いのり かれら あくじ てき
美 しい 膏、我が 首 を悩ます能わざる者なり、唯我が 禱 は彼等の 惡事に敵す。

かれら しゆちやう いわお あいだ さん わ ことば にゆうわ き われら つち ごと き
彼等の 首 長 は巖石の 間 に散じ、我が 言 の 柔 和なるを聴く。我等を土の如く 斫り

くだ わ ほね ちごく くち ち お しゆ しゆ ただわ め なんぢ あお われなんぢ
碎き、我が 骨 は地獄の口に散りて落つ。主よ、主よ、唯我が目は 爾 を仰ぎ、我 爾

たの わ たましい しりぞ なか わ ため もう わな ふほうしゃ あみ われ まも
を恃む、我が 靈 を退くる母れ。我が爲に設けられし 罌、不法者の網より我を護

たま ふけんしゃ おのれ あみ かか ただわれ す え
り給え。不虔者は己の網に罹り、唯我は過ぐるを得ん。

【 第 1 4 1 聖 詠 】

わ こえ もつ しゆ よ わ こえ もつ しゆ いの わ いのり そのまえ そそ わ うれい
我が 聲 を以て主に呼び、我が 聲 を以て主に 禱 り、我が 禱 を其前に注ぎ、我が 憂

そのまえ あらわ わ たましい うち よわ とき なんぢ われ みち し わ ゆ みち
を其前に 顯 せり。我が 靈 の 衷 に弱りし時、 爾 は我の途を知れり、我が行く路

おい かれら ひそか わ ため あみ もう われみぎ め そそ ひとり われ みと
に於て、彼等は 竊 に我が爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認む

もの われ のが ところ わ たましい かえりみ もの しゆ われなんぢ よ
る者なし、我に遁るる 所 なく、我が 靈 を 顧 る者なし。主よ、我 爾 に呼びて

い なんぢ われ かくれが い もの ち おい われ ぶん わ よ き たま
云えり、 爾 は我の 避 所 なり、生ける者の地に於いて我の分なり。我が呼ぶを聴き給

われはなはだよわ われ はくがい もの すく たま かれら われ つよ
え、我 甚 弱りたればなり、我を迫害する者より救い給え、彼等は我より強けれ

ばなり。

⑩ わ たましい ひとや ひ いた われ なんぢ な さんえい たま
我が 靈 を 獄 より引き出して、我に 爾 の名を讚榮せしめ給え。

われ い ごと なんぢ しんせい いましめ はな
我 イエルサリムより出づるが如く 爾 の 神 聖なる 戒 より離れて、イエリホンの

よく いた どせい おもんばかり ひ どうぞく おもい あ これら こ おんちやう
愆に至り、度生の 慮 に惹かれて、盜賊の 思 に遇い、此等より子たる 恩 寵 の

ころも は きず おお いき もの ごと ふ しさい きた きず み かえり
衣 を剥がれ、傷に蔽われて、氣息なき者の如く臥す。司祭は來りて、傷を見て 顧

みざりき、レヴィも忌みて過ぎたり。唯 爾 、童貞女より言い難く身を取りし主ハリ

かみ なんぢ すくい わき なが ち みづ あぶら ごと わ きず そそ これ
ストス神よ、 爾 の 救 の 膏 より流したる血と水とを 膏 の如く我が傷に沃ぎ、之を

いや じれん よ われ てんじやう かい あわ たま
醫して、慈憐なるに因りて、我を天 上 の會に合せ給え。

⑨ ^{なんぢおん われ たま とき ぎじん われ めぐ}爾 恩を我に賜わん時、義人は我を環らん。

^{われ}我 ^いイエリサリムより出づるが如く ^{なんぢ しんせい いましめ はな}爾の神聖なる戒より離れて、^{よく いた どせい おもんばかり ひ とうぞく おもい あ これら こ おんちよう}イエリホンの怒に至り、度生の慮に惹かれて、盗賊の思に遇い、此等より子たる恩寵の
^{ころも は きず おお いき もの ごと ふ しさい きた きず み かえり}衣を剥がれ、傷に蔽われて、氣息なき者の如く臥す。司祭は來りて、傷を見て顧
^{みざりき、レヴィも忌みて過ぎたり。唯 爾、童貞女より言い難く身を取りし主ハリ}
^{かみ なんぢ すくい わき なが ち みづ あぶら ごと わ きず そそ これ}ストス神よ、爾の救の膏より流したる血と水とを膏の如く我が傷に沃ぎ、之を
^{いや じれん よ われ てんじよう かい あわ たま}醫して、慈憐なるに因りて、我を天上の會に合せ給え。

⑧ ^{しゅ われふか ところ なんぢ よ しゅ わ こえ き たま}主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給え、

^{しゅ なんぢ ちめいしゃ なんぢ い なんぢ いましめ はな かれら きとう}主よ、爾の致命者は爾を諱まざりき、爾の戒より離れざりき。彼等の祈禱
^{よ われら あわれ たま}に因りて我等を憐み給え。

⑦ ^{ねが なんぢ みみ わ いのり こえ き い}願わくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

^{どうていぢよ}童貞女よ、^{よよ さき ぎてい なんぢ あらわ なんぢ まえ た あん}ガヴリイルは世世の前の議定を爾に顯して、爾の前に立ちて、安
^{と い たねま ち よろこ や いばら よろこ はか ふかさ}を問いて曰えり、種蒔かざる地よ、慶べ、焚かれざる棘よ、慶べ、量られざる深
^{よろこ てん わた はし およ み たか かけはし よろこ しんせい}よ、慶べ、天に渡す橋、及びイアコフの見たる高き梯よ、慶べ、神聖なるマ
^{つぼ よろこ のろい と もの よろこ よ おこ もの よろこ しゅ}ンナの壺よ、慶べ、詛を釋く者よ、慶べ、アダムを喚び起す者よ、慶べ、主は
^{なんぢ とも}爾と偕にす。

⑥ ^{しゅ も なんぢふほう ただ しゅ だれ よ た しか なんぢ ゆるし ひと}主よ、若し爾不法を糺さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の

^{なんぢ まえ つつし ため}爾の前に敬まん爲なり。

^{どうていぢよ}童貞女よ、^{よよ さき ぎてい なんぢ あらわ なんぢ まえ た あん}ガヴリイルは世世の前の議定を爾に顯して、爾の前に立ちて、安
^{と い たねま ち よろこ や いばら よろこ はか ふかさ}を問いて曰えり、種蒔かざる地よ、慶べ、焚かれざる棘よ、慶べ、量られざる深
^{よろこ てん わた はし およ み たか かけはし よろこ しんせい}よ、慶べ、天に渡す橋、及びイアコフの見たる高き梯よ、慶べ、神聖なるマ
^{つぼ よろこ のろい と もの よろこ よ おこ もの よろこ しゅ}ンナの壺よ、慶べ、詛を釋く者よ、慶べ、アダムを喚び起す者よ、慶べ、主は

なんぢ とも
爾と偕にす。

われしゆ のぞ わ たましいしゆ のぞ われかれ ことば たの
⑤我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を待む。

どうていちよ よよ さき ぎてい なんぢ あらわ なんぢ まえ た
童貞女よ、ガヴリイルは世の前の議定を爾に顯して、爾の前に立ち
て、安を問いて曰えり、種蒔かざる地よ、慶べ、焚かれざる棘よ、慶べ、量られ
ざる深よ、慶べ、天に渡す橋、及びイアコフの見たる高き梯よ、慶べ、神聖
なるマンナの壺よ、慶べ、詛を釋く者よ、慶べ、アダムを喚び起す者よ、慶べ、
しゆ なんぢ とも
主は爾と偕にす。

わ たましいしゆ ま ばんにん あさ ま ばんにん あさ ま はなはだ
④我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

むてん どうていちよ てんぐんしゆ い なんぢひと ごと われ あらわ いかん ひと こ
無玷なる童貞女は天軍首に謂う、爾人の如く我に現れて、如何ぞ人に超ゆ
る言を言う、蓋神は我と偕にし、我の胎に入らんと曰えり、我に告げよ、如何ぞ
われひろ すまいおよ こ せいせい ところ きよげん もつ われ まど
我廣き住所及びヘルヴィムに超ゆる成聖の處とならん。虚言を以て我を惑わす
なか けだしわれよく し こんいん あづか なんす こ う
勿れ、蓋我欲を知らず、婚姻に與るなし、何爲れぞ子を生まん。

ねが しゆ たの けだしあわれみ しゆ おおい あがない かれ
③願わくはイスライリは主を恃まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、

かれ そのことごと ふほう あがな
彼はイスライリを其悉くの不法より贖わん。

むてん どうていちよ てんぐんしゆ い なんぢひと ごと われ あらわ いかん ひと こ
無玷なる童貞女は天軍首に謂う、爾人の如く我に現れて、如何ぞ人に超ゆ
る言を言う、蓋神は我と偕にし、我の胎に入らんと曰えり、我に告げよ、如何ぞ
われひろ すまいおよ こ せいせい ところ きよげん もつ われ まど
我廣き住所及びヘルヴィムに超ゆる成聖の處とならん。虚言を以て我を惑わす
なか けだしわれよく し こんいん あづか なんす こ う
勿れ、蓋我欲を知らず、婚姻に與るなし、何爲れぞ子を生まん。

ばんみん しゆ ほ あ ばんぞく かれ あが ほ
②萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ、

むけい もの い かみ ほつ ところ てんせい じゆんじよか ひと こ こと
無形の者は曰う、神の欲する所には天性の順序勝たれて、人に超ゆる事は
おこな しせいしけつ もの われ まこと ことば しん かれよ い いまなんぢ
行わる。至聖至潔なる者よ、我の眞の言を信ぜよ。彼籲びて曰えり、今爾の
ことば ごと われ な われ み み われ か もの う かれ けつごう
言の如く我に成るべし、我は身なくして身を我より藉りし者を生まん、彼が結合に

よ 依りて、ひと はじめ くらい のぼ ため ひとりこれ よく しゆ
人を始の位に升せん爲なり、獨之を能する主なればなり。

① けだしかれ われら ほどこ あわれみ おおい しゆ しんじつ なが そんな
蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

むけい もの い かみ ほつ ところ てんせい じゆんじよか ひと こ こと
無形の者は曰う、神の欲する所には天性の順序勝たれて、人に超ゆる事は

おこな しせいしけつ もの われ まこと ことば しん かれよ い いまなんぢ
行わる。至聖至潔なる者よ、我の眞の言を信ぜよ。彼籲びて曰えり、今爾の

ことば ごと われ な われ み み われ か もの う かれ けつごう
言の如く我に成るべし、我は身なくして身を我より藉りし者を生まん、彼が結合に

よ 依りて、ひと はじめ くらい のぼ ため ひとりこれ よく しゆ
人を始の位に升せん爲なり、獨之を能する主なればなり。

【 生神女讃詞 第2調 】



こう えい は ち ち と こと せい しんに きす、いまも
光 榮 父 子 聖 神 歸 今
いつ も よ よ に、ア ミ ン。
何時 世 世
こんにち えいきゆう の おうぎ は あらわれ、か
今日 永 久 奥 義 顯 神
みのこ は ひと の こ と な る、しもなる
子 人 子 爲 下
ものをうけて、われにかみなるものをあ
者 受 我 上 者 與
たえんためな り。むかしアダムはあやま
爲 昔 誤
れり、かみとならんとほっしてえざり
神 爲 欲 得
き、かみはひととなる、アダムをかみと
神 人 爲 神

なさんためな り。ぞうぶつはたのし
 爲 爲 造 物 樂
 み、ばんせいはいわうべし、けだし
 萬 性 祝 蓋
 アルハゲルはうやうやしくどうていぢよのまえに
 天 使 首 恭 童 貞 女 前
 たちて、かなしみにかえてよろこびをの述
 立 悲 哀 易 慶 賀 述
 ぶ。じんじによりてひととなりしわれら
 仁 慈 因 人 爲 我 等
 のかみよ、こうえいはなんぢにき歸
 神 光 榮 爾 ぢ 歸
 す。

【 聖入 】

司祭) ^{えいち} 睿智、^{つつし} 肅 ^た みて立て、

【 聖ソフロニイの祝文 】

せいにしてふくたるじょうせいなるてんのちちの
 聖 福 常 生 天 父
 せいなるこうえいのおだやかなるひかりイイ
 聖 光 榮 穩 光
 ススハリストスよ、われらひのいりにいたりく暮
 我 等 日 入 至 暮

れのひかりをみて、かみちちとことせいしん
 光 見 神 父 子 聖 神
 をうと う。いのちをたもうかみのこ
 歌 生 命 賜 う 神 の 子
 よ、なんぢはいつもけいけんのこえにてうたわ
 爾 何 時 敬 虔 聲 歌
 るべし、ゆえにせかいはなんぢをあがめ
 故 世 界 爾 崇
 ほむ。
 讚

【 第一の提綱 ^{プロキメン} 】

司祭) つつし き しょうじん へいあん えいち つつし き
 謹みて聴くべし、衆人に平安、睿智、謹みて聴くべし。

誦經) だいし しらべ いの せまき おい われら たすけ あた たま ひと まもり むな
 プロキメン、第四の調、祈る、狭難に於て我等に助を昇え給え、人の護佑は虚

しければなり、

いのる、せまきにおいてわれらにたすけをあ
 祈 狭 難 於 我 等 助 昇
 たえたまえ、ひとのまもりはむなしけれ
 給 人 護 佑 虚
 ばなり。

誦經) かみ なんぢわれら す なんぢわれら やぶ
 神よ、爾我等を棄て、爾我等を敗れり、

いのる、せまきにおいてわれらにたすけをあ
 祈 狭 難 於 我 等 助 昇

た え た ま え 、 ひ と の ま も り は む な し け れ
 給 人 護 佑 虚
 ば な り 。

誦經) ^{いの} 祈る、^{せまき} 狹難に^{おい} 於て^{われら} 我等に^{たすけ} 助を^{あた} 昇え^{たま} 給え、

ひ と の ま も り は む な し け れ ば な り 。

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{そうせいき} 創世記の^{よみ} 讀、

司祭) ^{つつし} 謹^き みて^き 聽く^{べし} べし、

【 創世記 8章4～21節 】

誦經) ^{はこぶね} 方舟は^{しちがつ} 七月に^{いた} 至り、^{そのつき} 其月の^{じゅうしちにち} 十七日に^{ざん} アララト山に^{とど} 止まれり。^{みづようや} 水漸く^{げん} 減じ

^{じゅうがつ} て十月に^{いた} 至り、^{じゅうがつ} 十月の^{ついたち} 朔に^{やま} 山の^{みねあらわ} 峯現^{しじゅうにち} れたり。^へ 四十日^{のち} を^{その} 歴て^{その} 後、^{その} ノイ^{その} 其

^{はこぶね} 方舟に^{つく} 作り^{まど} たる^{ひら} 窓を^{からす} 啓^{はな} きて、^{みづ} 鴉^ち を^か 放^{いた} ち^{かけ} たらば、^{かけ} 水の^{かけ} 地に^{かけ} 潤^{かけ} る^{かけ} に^{かけ} 至^{かけ} る^{かけ} まで、^{かけ} 駟^{かけ} り

^{おうらい} て^{そののち} 往^ち 來^{おもて} せり。^{みづ} 其^{しりぞ} 後^み 彼^{ため} は^{はと} 地の^{はな} 面^{はと} より^{はと} 水^{はと} の^{はと} 退^{はと} き^{はと} し^{はと} か^{はと} を^{はと} 見^{はと} ん^{はと} 爲^{はと} に、^{はと} 鴿^{はと} を^{はと} 放^{はと} ち^{はと} し^{はと} に、^{はと} 鴿^{はと}

^{そのあし} は^{とど} 其^{ところ} 足^え を^{かれ} 止^{はこぶね} む^{かえ} る^{みづぜんち} 所^{おもて} を^あ 得^あ ず^あ して、^あ 彼^あ に^あ 方^あ 舟^あ に^あ 還^あ れ^あ り、^あ 水^あ 全^あ 地^あ の^あ 面^あ に^あ 在^あ り^あ たらば^あ な

^{かれて} り、^の 彼^{これ} 手^と を^{はこぶね} 伸^{おのれ} べ^{ところ} て^い 之^{また} を^{なぬか} 取^ま り、^{ふたたび} 方^{はと} 舟^{はと} に^{はと} 己^{はと} の^{はと} 所^{はと} に^{はと} 入^{はと} れ^{はと} たり。^{はと} 又^{はと} 七^{はと} 日^{はと} を^{はと} 待^{はと} ち^{はと} て、^{はと} 再^{はと} 鴿^{はと}

^{はこぶね} を^{はな} 方^{はとくれ} 舟^{およ} より^{そのくち} 放^{かんらん} ち^{わかば} し^{ふく} に、^{かれ} 鴿^{かえ} 暮^{ここ} に^{ここ} 及^{ここ} び^{ここ} て、^{ここ} 其^{ここ} 口^{ここ} に^{ここ} 橄^{ここ} 欖^{ここ} の^{ここ} 新^{ここ} 葉^{ここ} を^{ここ} 銜^{ここ} み^{ここ} て^{ここ} 彼^{ここ} に^{ここ} 還^{ここ} れ^{ここ} り、^{ここ} 是^{ここ}

^{おい} に^{みづ} 於^ち て^{おもて} ノイ^{しりぞ} 水^し の^{さら} 地^{また} の^{なぬか} 面^ま より^{はと} 退^{はな} き^{はな} し^{はな} を^{はな} 知^{はな} れ^{はな} り。^{はな} 更^{はな} に^{はな} 又^{はな} 七^{はな} 日^{はな} を^{はな} 待^{はな} ち^{はな} て、^{はな} 鴿^{はな} を^{はな} 放^{はな} ち^{はな} し

^{また} に、^{かえ} 復^{さいせい} 彼^{ろくひやくいちねん} の^{いちがつ} 所^{がんにつ} に^{みづち} 還^か ら^か ざ^か り^か き。^か ノイ^か 在^か 世^か の^か 六^か 百^か 一^か 年^か の^か 一^か 月^か の^か 元^か 日^か に^か 水^か 地^か に^か 洩^か れ

^{つく} たり、^{ところ} ノイ^{はこぶね} 作^{おおい} り^{ひら} し^{みづ} 所^ち の^{おもて} 方^か 舟^か の^か 蓋^か を^か 啓^か きて、^み 水^み の^み 地^み の^み 面^み に^み 洩^み れ^み たる^み を^み 視^み たり。^み 二^み 月^み

^に の^に 二^に 十^に 七^に 日^に に^に 至^に り^に て^に 地^に 乾^に き^に たり。^に 主^に 神^に は^に ノイ^に に^に 謂^に いて^に 曰^に え^に り、^に 爾^に 及^に び^に 爾^に の^に 妻^に 、

なんぢ しょしおよ なんぢ しょし つま とも はこぶね い なんぢ とも あ およそ けもの
爾の諸子及び爾の諸子の妻、共に方舟より出づべし、爾と偕に在る凡の獸、

およ およそ にく とり かちく いた およ およそ ち は もの おのれ とも ひ いた
及び凡の肉、鳥より家畜に至るまで、及び凡の地に匍う者を己と偕に引き出

これら ち さん ち うえ う かつぶ ここ おい およ そのつま そのしょし
せ、此等は地に散じて、地の上に生み且殖ゆべし。是に於てノイ及び其妻、其諸子、

そのしょし つま とも い およそ けもの およそ かちく およそ とり およそ ち は もの
其諸子の妻、共に出でたり、凡の獸、凡の家畜、凡の鳥、凡の地に匍う者、

そのるい したが はこぶね い しゅ ため さいだん きづ およそ きよ かちく
其類に従いて方舟より出でたり。ノイは主の爲に祭壇を築き、凡の潔き家畜

およ およそ きよ とり と はんさい だん うえ ささ しゅ そのこうば かおり う
及び凡の潔き鳥より取りて、燔祭を壇の上に獻げたり、主は其馨しき香を享

けたり。

【 第二の提綱 ^{プロキメン} 】

司祭) ^{つつし} 謹 ^き みて聴くべし、

誦經) ^{だいろく} プロキメン、^{しらべ} 第六の調、^{かみ} 神よ、^わ 我が^よ 籲ぶを^き 聴き、^わ 我が^{いのり} 祈を^き 聴き^い 納れ^{たま} 給え、



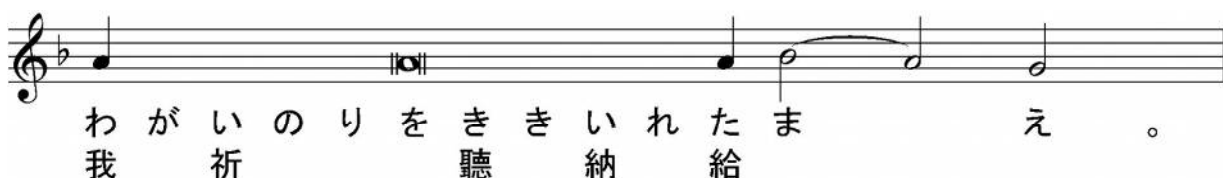
かみよ、わがよぶをきき、わがいのりを
神 我 籲 聴 き 我 祈
ききいれたたまえ。
聴 納 給

誦經) ^{われち} 我地の^{はて} 極より ^{なんぢ} 爾に^よ 呼ぶ、



かみよ、わがよぶをきき、わがいのりを
神 我 籲 聴 き 我 祈
ききいれたたまえ。
聴 納 給

誦經) ^{かみ} 神よ、^わ 我が^よ 籲ぶを^き 聴き、



わがいのりをききいれたたまえ。
我 祈 聴 納 給

【 祝福 】

司祭) 睿智、肅みて立て、ハリストスの光は衆人を照らす。

誦經) 箴言の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

【 箴言 10章31節～11章12節 】

誦經) 義者の口は智慧を流し悪者の舌は斷たれん。義者の唇は悦ぶべきことを知り、

悪者の口は戻れることを語る。詐偽の權衡は主の惡む所、正しき重量は其悦ぶ

所なり。驕傲來れば耻辱も亦來る、謙る者と偕に智慧あり。義者は死して痛惜

を遺し、悪者の滅は俄にして喜悦を致す。正直者の端莊は彼等を導き、悖逆

者の邪曲は彼等を滅さん。貨財は震怒の日に益なし、惟義は死より救わん。

無玷者の義は其途を坦にし、悪者は其惡に因りて跌れん。正直者の義は彼等を

救い、不法の者は其不法に因りて執えられん。義人は死して後其望絶えず、不法

の者の望は亡ぶ。義者は艱難より救われ、悪者は代りて之に陷る。貳心の者

は口を以て其鄰を亡し、惟義者は知識に因りて救わる。義者幸福を獲る時は邑

楽しみ、悪者亡ぶる時は歡あり。義者の祝福に因りて邑は高くせられ、悪者

の口に因りて圯さる。智慧なき者は其鄰を侮り、智慧ある人は緘黙を守る。

※ 願わくは我が禱は、、、へ